

SAHKA

201507



2015/7/25 14:21 2015/7/25 21:15 2015/7/25 22:28 2015/7/25 23:10

SAIHIKA201507 表紙 「初声」 鴉和 P.1

MOKUGI-モクジ・ 矢野ヒカル P.2

馬鹿と天才は次元一重 マウス P.3

君のいない世界はこんなにも素晴らしい 3 T.K P.7

天球少女と生命の樹『一』 矢野ヒカル P.15

From Writers 鴉和 P.55

「シンクロシティへようこそ、お客様」

受付嬢が笑顔と共に新たな入場者を迎え入れた。

「あら、お客様は初めていらしたのですね。では、この都市の簡単な説明をさせていただきます」

黒い髪に青い瞳を持ち、紺を基調とした衣服に帽子と、白い手袋をしている。まさしくガイドといったところだろうか。

「この都市は電子の海に漂う実存在を持たない場所。都市内の全てのモノ、ヒト、もちろん私もお客様も、みな電気信号の集合体に過ぎません」

けれど、と彼女が付け加える。

「この都市の中でお客様が体感するものは脳を通してフィードバックされますので、実世界と同じように娯楽を楽しむことが出来ます。この広大な都市をその足で歩いていくこと出来ずし、電子空間であることを活かして目的地へ『ジャンプ』することも可能です」

フィードバックという言葉に一つ疑問を投げかける、痛みなどはどうなるのかと。

「人間らしい生き方を維持するために痛覚なども普段は機能させることを推奨しますが、ご希望があれば自由に設定が可能です。その際は私にその旨を連絡ください」

お伝え忘れていました、と彼女が最後に告げる。

「私はお客様や他の住人の方と違い、中央コンピュータの管理するAIでありますので、お客様のご要望があればいついかなる場所であってもお応えします。今より私はあなた専属のコンシェルジュでありますので、お気軽にお呼びください」

彼女に名前を問う。

「名前、でございますか。識別番号ならございますが、お客様の求める答えとは少し違いますね。お客様、いえご主人様のお好きなようにお呼びください」

少し考え、たまたま思いついた言葉を名前とした。

「……はい。では、ご主人様が次にお目覚めになる日まで、これからよろしくお願いいたします」



「どうだ」

電子都市開発チームメンバーの一人である男は言った。黒髪に黒い瞳の東洋人だ。

「うーん。もう少し胸があつた方がいいんじゃないか？ あともっと親しみやすい感じですか」

同じくメンバーの一人である男が返す。金髪で背の高い西洋人である。

「そうかな？ 俺のドストライクってあんな感じなんだけど」

黒髪が悩ましげに顎に手を当てた。

電子都市開発チームは、来るべき人類の異世界移民計画に

備えて設立された。コールドスリープ状態における人類発展のため、最先端の医学や工学の知識を有する超一流のメンバーで構成されている。彼らの星で最も優れた者達、英知の結集といっても過言ではないだろう。

そんな彼らは順調に計画を進め、基幹ともいべきプログラムは無事完成させたのだが、そんな彼らの前に一つ問題が生じた。

脳以外を眠らせた状態でなお人類がその歩みを止めぬための電気信号で共有される仮想世界を作る。

その中で構成され生きていくすべての都市市民につくAIのコンシェルジュ、その容姿や性格に関して、チーム内で意見がバラバラに分かれたのだ。

当初は黒髪一人に任されたプログラムだったので、完成したものをそのまま運用する予定だったが、見たチームメンバーがそれぞれ自分たちで作ると言いだし、結果この場でお互いの作ったものを検証することになった。

「じゃあ次は俺の番だ」
金髪が自信満々に言い、プログラムを起動した。



「コンニチハ！ 君、ここに来るのは初めてネ？ 私がきっちり説明するヨ！」

胸元の大きく開いた服にミニスカートを履いた受付嬢が現

われた。

「この都市はシンクロロシティ。電子のよってできた都市なのネ。ここで君は自由に生活出来るんだヨ。電子の体だから色々ベンリ！ 凄いでスネ」

「私のオススメは3A地区にあるバーガークイーン！ 頬が落ちること間違いないネ」

「生活上の説明？ ワタシ難しい説明ってよく分からナイんだよネ。細かいことはコンソールを使って自分で調べてネ」

「いつでも呼ばれたら参上するから、是非是非頼ってほしいのネ。ユーシー？」



「駄目じゃねえか！」

黒髪が盛大に叫んだ。

「？」

どことが、とでも言いたげに金髪が首を傾げる。

「コンシェルジュの癖に何一つ役に立ってねえよ」

「いや、可愛いし」

「そこは重要じゃないんだよ」

「でも生活に張り合いが出るじゃん？ 案外大事だよ、そこ

も」

それも一理あるか、と黒髪は頷いた。といってもあそこま

で個人に投げてしまつては案内役の意味がない。

「おやおや、皆さんバランスというものを分かっているやうだ」

二人の声を遮るように、茶髪の男が問答に割って入った。銀髪碧眼のメガネの西洋人だ。金髪の方よりも幾分鼻が高い。「皆さんこれを見れば納得いくはずですよ。では」

◆

「きやるるるるん♪ こんにちはお兄ちゃん！」

◆

二人の拳がメガネの顔に突き刺さり、眼鏡を叩き割った。「おいてめえ、これのどこにバランスがあるんだ？ あん、言ってみろよオラア」

黒髪が鼻息荒くメガネに詰め寄る。

「ちよつと待ってくれよ。最後まで見ればきつと——」

「ないだろ、絶対に納得するわけがないだろ。何でランドセルを背負った小学生女子が出てくるんだよ。ふざけてんのか？」

「あのランドセルから飛び出たリコーダーがポイントでだな、あと着せ替えて体操服バージョンもあるぞ」

金髪がやれやれ、と呆れたポーズをする。

「あんなべったんこの何が良いつてんだ。理解に苦しむよ」

そこじゃない、そこじゃないんだ。と黒髪には山ほど言いたいことがあったが、拳を握ってこらえた。長い計画を進める中で苦楽を共にしてきたチームメンバー達と、こんなところで溝を作ってしまうなんて。黒髪は頭を抱えた。

「お前ら、こんなことでよくそこまで熱くなれるな」

「リーダー！」

先ほどまで沈黙を保っていたユニットリーダーが口を開く。初老の東洋人で、真つ白に染まった頭と鋭い目つきがその威厳をさらに強くしている。もちろん、このプロジェクトのリーダーに見合った能力の持ち主だ。

◆

「こういうのは変に気負って作る必要はないんだ。これまでの複雑難解なプログラムに比べれば圧倒的に簡単だろうが」
そういつて、リーダーは作ったプログラムを披露した。

◆

「ふん、お主が私の主か。随分と冴えないやつじゃ」

現れたのは、狐の耳と尻尾を生やして巫女装束に身を包む幼女だった。

「まあ、これが妾の存在意義じゃ。文句は言うまいよ」

「なに？ これをくれるじゃと？ 油揚げか……ん、旨い」

「ふん、困ることがあれば何でも言うんじゃぞ？ 何だ、妾に出来ることなら、手伝ってやるからの……」

◆

僕は開けてはいけない扉を開けてしまったんだ。まさかたった一つの簡単なプログラムを巡って、こんなことになってしまふなんて。

最早意見を言う気力も湧かず、黒髪は一人項垂れていた。隣では他のチームメンバーも混ざってああたこうだと罵り合っている。性癖の罵倒大会とは何と醜いことか。

と、ふと我に返って思い出す。

「あれ？うちのチーム女性いないじゃん」

男性版コンシエルジュを作ったやつは一人しかいなかったのだ。そいつの好みはさておき、これでは設計をやり直さなければならぬ。都市市民には当然女性もいるのだから、男性型のコンシエルジュも必要に違いなかった。

群がるチームメンバーに向かいながら、黒髪は叫んだ。

「オペレーターガールって、いいよね！」

心の殴り合いを終えたチームは更に団結が深まった。

コンシエルジュの方は、個人個人で見た目を好きに変更できるようにした。性格や口調はもちろん、一人称や主への呼び方も変えられる。因みに一部服装は要課金だ。

そして遠い未来、長い次元の旅を終えた人類が新天地に降り立った後、酷い少子化問題が発生したとか。

あとがき

こんにちは、マウスです。

リフ何とかは諸事情により遅れてます。別に待ちに待ったフリゲがアツプデートされたからとか、ファイアーエムブレムばっか遊んでたからとかではないです。テスト勉強してたんです。嘘じゃないことないです。

ものすごく適当な思い付きで書いた小説ですね。元の企画がアレですからね、その割には綺麗にまとまった方だと思います。

そして、別にリフ何とかと関係がないこともないです。多分三年後くらいには明らかになるんじゃないですかね、多分。

残りの二人が頑張ってるようなのでそれなりにやっていきます。多分夏休みはツクールの方に時間割いてるんじゃないかな。

次の号にもあとがきかけたらいいな、多分前後編になるんだろうな、と未来に心を馳せつつお別れです。

君のいない世界はこんなにも素晴らしい

T.K

前回までのあらずじ。ファンタジー世界にきて何とか疑いが晴れたと思っただらお次は敵襲。勢いで戦つとか言つちやうし何してんだ俺。

そんなわけでニルナさんと最上階の王の間を目指す。姫様が戦い始めてからすでにかなりの時間が経過しているらしく、先の轟音からしてあまり時間は残されていないだろう。

「ロアとは何なのか、簡単に説明しておきます」

ニルナさんは涼しい顔をして階段を駆け上がる。一方俺は少し息が上がっていた。受験のために部活動から遠のいていたツケだ。こんなことになるならムキムキマツチョマンに鍛え上げておいて、避難所で脱いで女の子たちがワーキヤー変態よーみたいなの。

「聞いていますか？」

「はいごめんなさい聞いてます」

「ならいいのですが、ロアが代償を必要とすることはお話ししましたよね？」

「はい」

姫様は「世界に代償、対価、犠牲を支払い、それに見合うものの範疇で全ての望みを叶える」と言っていた。

「今は時間がないので戦うのに必要なことだけお話すると、ロアを一度も使つたことのないあなたはまずゼロアスのもつエリアルに接続しなければなりません」

「エリアル？」

「はい。古い言葉で、図書館という意味です。『ロア』というのも実は大戦乱前の言葉らしいのですが、元の意味はわかっていません。……話が逸れましたね。

それで、ロアの初等者はゼロアスと直接契約した者と契約することでエリアルに接続することができるようになります。そもそもロアはゼロアスに接続することではか発動できないのです」

「接続ってどうやれば……」

もうずいぶんと最上階に近づいているが、すごい速さで階段を昇るニルナさんについていくのがやっとだ。もう喋るのもしんどいけど、こんなんで大丈夫なのか、俺……。

「それは姫様が直接教えてくださいます。あなたはロアを使うときはエリアルに接続して、既存のロアを呼び出すということだけ覚えておいてください。そして、その際に最も隙が発生するということも」

「はい」

「ロアを使い慣れた者ならその動作も一瞬で行えるのですが……がんばってください」

王の間の大きな扉の前についた。中では水の音や何かが碎ける音がしている。そんな戦地に赴こうという俺はというと肩で息をしている。一方ニルナさんは無表情だ。カツコ悪いっただらありやしない。

「あなたはここで待っていてください。姫様が隙をみて契約を行ってくださいると思います。では、健闘を祈ります」

言い終わるなり扉を少し開け、メイド服のどこにしまっていたのか剣を取り出し、王の間に飛び込んでいった。というか本当にメイド服で戦うんですか。

大丈夫ですか見えたりしませんか。

大丈夫じゃないのは俺の頭だ。女の子二人が戦ってるのに俺はこんなところで縮こまっているだけだよ。

そのとき、姫様の短い悲鳴とともに王の間から剣が吹っ飛んできた。

『声は出さないでくださいね。それを静かに拾ってください』

「えっ」

『静かに』

俺は黙った。少し曇った声はどこからともなく聞こえる。一つだけわかるのは、これは間違いないく姫様の声だということだ。

『初めにおでこをぶつけましたよね、あれは本来この用途で使うものなのです。

さあ早く剣を』

抜き足差し足忍び足。王の間から見えないように扉の影を伝い、床に落ちている剣をすっと拾った。刀身はわずかに桜色を帯びていて、鏢は花卉のようだった。洋剣だが、刀のような美しさがあった。見つめていると、まばたきした瞬間、それは一輪の花に変わっていた。

『それはオリジナルのゼロアスです。国民に配られている、機能を制限した別物でもなく、自警団に渡してあるレプリカでもありません。正真正銘、原典です。さっきお話したときにゼロアスには触れたことなどないと言いましたが、すみません。あれは嘘です。本来ゼロアスは領主が直接振るう武器で、それは領主だけの秘密という決まりなのです。なのでニルナさんもゼロアスのオリジナルについては知らず、私もあの場ではそう言うしかありませんでした。ですが非常事態なので、やむを得ません』

その花は、茎から葉が一枚だけびよっこり出ていて、花卉が五枚。不思議な

のは、刻一刻と薄い花びらの色が変わっていつているように見える、というより何色にでも見えるということだ。

『あなたはこれからゼロアスと契約します。私とではなく、ゼロアスと。たぶんニルナさんに怒られてしまいますけど……ともかく、今からロアを発動するトリガーを決めます。接続するときの儀式というか……癖といったほうが意味合いですか？』

「くっ」

王の間からガラスのようなものが砕ける音と、ニルナさんの苦しそうな声が聞こえてきた。

『心配ありません。続けますよ。あなたがロアを使うときに用いたい所作をしてください。指を鳴らす、手を強く握る、息を吐く、何でもいいので自分のやりやすいことをしてください』

俺は困惑した。そんなことを急に言われても、これ後から変えられるんだろうか。もし、ズボンを脱ぐ、とかにしたらズボンを脱がないとロアを使えないようになるんだろうか。それはそれで面白けれどこは真面目にいいっ。

俺は意識的に目を瞑って、開いた。

右手に持っていた花が左手にも増えていた。

『成功したようですね。それはどちらも本物です。ゼロアスなしでは敵しいので片方は私が回収します』

右手に持っていた花が、今度は忽然と消えた。ちゃんと見ていたはずだが、本当に消えた。持っている感覚も消えた。正直全くわけがわからない。

『私がサポートできるのはここまでです。あとはリーリス様にお任せします』
リーリス様？　ここまできてまだ誰か新しい登場人物が……？

と思っただけなら目の前にひらひらと蝶が飛んできた。あの不思議な花びらと同じ色をしている。

『やあ。はなたれ小僧くん』

いきなり蝶に話しかけられた。姫様と同じように少し声が曇っているが、女性だ。それにしても初対面でいきなりその呼び方はないんじゃないだろうか。

『相手はかなりの手練だが、それでもやるかね？』

俺はそのためにここにきたんですけど……。

『ならば、吾が手助けしてやる。ノリスを死なせたことはないのな』

蝶はひらひらと舞い、俺の持っている花に止まった。

『本を想像しろ。できるだけ分厚く、大きいものだ。何しろロアは一万種類以上あるからな』

言われるとおりにした。目の前にうつすら、イメージしたとおりの本が浮かんでいるように見える。

『次にページをめくっていけ。そのとき、自分が戦っている様を想像しろ』

目の前の本に集中する。ページがものすごい速度で右から左に流れる。戦う、か……そうだな、剣を持って、鎧を着て、構える。

意識的にまばたきをすると、ずしんと体が重くなった。

「……」

花は剣に変わり、服は鎧に変わっていた。

『なかなか筋がいい。はなたれ小僧あらため小童だ。しかし惜しい。ノリスの姿を真似したのだから、あの娘の鎧には重さがない。そしてニルナは自らの身体も重くも変えている。』「今まで言えはわかるな。だが一つ覚えておけ。

どんな熟練者でも、吾ですらロアを同時に二種類発動することはできない。擬

似的にならば可能だが、まあ戦いながら覚えていくが良い。お主がここで死ななければ、だがな』

やってやるうじゃないか。ニルナさんの話と蝶の話を総合すると、この本には既存のロアがまとまっているはずだ。ならば戦いやすい、かつ防御力が高い装備が呼び出せるはずじゃないか？

俺はページをめくった。高速で流れるページを見てると何となく、そのページに記録されているものが探しているロアと一致しているか否かというのがわかるような気がする。これは違う、これも違う。そうやってページを捲っていく。

あつた、これだ。

まばたきをすると、体が軽くなった。着ている服を見ると、春先にいつも着ているお気に入りの紅白ジャージになっていた。

「あれ？」

『それで良い。お主の思う動きやすい服装がそれだったというだけ。斬られてもさっきの鎧くらいの耐久力がある』

そういうことか……。だがこれで準備は整った。

『言い忘れておつたが、もう代償は払われているぞ』

何の変化もないんですがそれは。

『お主が何の代償を払うことになったのか吾もわからん。ゼロアスの契約者と契約すればその者と同じ代償を払うことになるが、お主は吾と直接契約した。故に、お主が最も失いたくないと思うものや、他の人間より優れた何かがお主自身からのみ、失われる。ノリスは「自由」の代償な為に限界までロアを使っても一定時間動けなくなるだけで済むが、もしもお主が「死」の代償や「記

憶」の代償だったとき、お主は死ぬか、それと同等の状態になるだろう。確認されている代償は、ほぼ全て時間が経てば元に戻るようなものだが、中にはそういう二度と元に戻らないような代償が存在する。心せよ』

恐ろしや。アニメや漫画の魔法みたいに連発できるものではないらしい。それどころか俺が何を代償にロアを使っているかわからない。腕を回したり足踏みしてみるも、不自然に体が動かなくなったりすることはないし、昔のことを思い出してみても覚えていることは覚えているし、忘れていることは忘れてる。当たり前だ。強いて言えばなんだかぼうつとすが、それはここまで走ってきて疲れているからだろう。

『以上だ。ロアの基本についてももう教えることはない。最後に一つ言うならば、お主がここで戦わないことを選んでも吾やノリスはお主を責めない、ということだ。ではな』

蝶は花からひらひらと飛び立ち、煌めく鱗粉と化して消えた。

俺は少しだけ開かれた扉の前に立った。この中に入ればもう引き返すことはできないだろう。逆にまた階段を降りれば元の日常に戻るかもしれない。外にある俺の家の扉から出れば帰ることだってできる。

だがそれでいいんだろうか。

初め、妹が変なことに首を突っ込まないように扉を閉じに来た。けれどあの避難所で俺も戦うと言ったときから俺の目的は変わったんだと思う。しかし命をかける意味なんて本当にあるんだろうか。姫様はそれはもうかわいいけど。魔法を使ってみたくいけど。颯爽と姫様とニルナさんを助けてヒーローになりたいけど。国民全員女の子だしハーレム作りたいけど。姫様はそれはもうかわいいけど。

何よりここで引き返すのはカツが悪い。

こう考えてみると煩惱しかないが、これで人を救えるのなら、別にいいんじゃないか。ヒーローになりたくたっていいじゃない、男の子だもん。

行こう。

扉に手をかけ、開ける。

中はひどい有様だった。床はあちこちが凹み、壁も柱も剣で斬られた跡でズタズタで、左右に流れていた水は何故かところどころが凍っている。

姫様は床に倒れていて、ニルナさんはその前で剣を持って立っていた。息が上がっているようだ。

そしてニルナさんの厳しい視線の先に、敵は立っていた。玉座の前、階段の上に彼はいた。とげとげとした赤い髪で片目しか見えないが、ひどく目付きが悪い。身長はここからではよくわからないが、俺と同じくらいだろう。服装は真つ黒に見えるが何だろうかあれは。ロアで作られたものならば用心しなくてはならない。そして極めつけは彼の周りだ。氷の柱が何本も立っている。玉座は完全に凍りついてた。

本をめぐり、ページを見つめる。ニルナさんが王の間に飛び込んでいったあれを再現する。まばたきすると同時に床を踏み込む。

すると俺の体は驚くほど簡単に地を離れ、一直線に敵へ向かっていった。剣を持つ腕の脇を閉め、突きの体勢にした。敵は俺に気づいた瞬間、驚いた顔をした。少し遅れて敵の周りにあつた氷の柱がうねり、水になって敵の正面を覆い、再度凍った。

いやこれ空中で止まるのか。というかこれはただの水か？ 何度も碎ける音が聞こえてきていたし、空中でさらに勢いをつければ碎けるんじゃないか？

俺は本に集中した。ページをめくれ。早く。

あった。

まばたきをして、発動する。瞬間、俺の体は追い風によって思いっきり加速した。

そのまま氷の壁に突っ込んだ。剣先が氷にめり込み、砕く。だがその先に敵はいなかった。氷の欠片とともに床に叩きつけられる。ふと、視界の左の影が動いた。咄嗟に左手に剣を持ち替え、四つん這いの状態から斜め後ろに剣を振った。

俺の剣は氷の柱にカッン、と当たった。危機感からすぐに右を見るともう目の前にまで氷の刃が迫っていた。ロアの発動は間に合わない。この体勢からでは避けることもできない。

そのとき、目の前に人影が現れ、全ての氷を叩き割った。さらにその氷の向こう側にいた敵に斬りかかったが、敵は後ろに飛び退いて下の水路に落ち、ニルナさんの剣は空を切った。

「あ、ありがとう」

「初めてにしては良い動きですが、直線的すぎます。相手の動きを見ましたか？ 攻めるときは常に相手の裏をかけ、守るときは常に最悪の場合を考へる。私の師匠の教えです」

「イエッサー！」

「……なんですかそれ」

ニルナさんはふふ、と笑った。だがすぐに元の冷静な表情に戻ると、「来ます」とだけ言った。

水しぶきが天井くらいまであがった。それらは空中で尖った氷に姿を変え、

落ちてきた。俺はさっきの大ジャンプの要領で、入り口の扉の方へ飛んだ。

「だめですー！」

ニルナさんがこっちを向いて叫んだ。大丈夫、わかっている。

敵は大きな氷の柱の上に乗り、それを伸ばして俺の方へ突っ込んできた。そりゃそうだよな。多対一は明らかに不利だからどうしても片方をすぐに削りに来るはずだ。それが弱いやつならなおさら。それに空中はロアを使わなければ自由に動けない。相手がロアを使う瞬間を狙えば反撃されることもない。

氷の柱に乗った敵は俺のすぐ近くまで迫り、その勢いのまま俺に剣を振り下ろした。避けない。避ければ絶対に避けられない追撃がくる。

俺は相手の振り下ろした剣に向かって自分の剣を振った。パリイなんてしたこともない。だがぶつつけ本番でも案外何とかなるものだ。

相手の剣は弾かれ、俺の剣も弾かれた。両方の懐がから空きの状態で、俺はパリイによる衝撃で落下し始める前にまばたきをし、さっき使ったブーストを使った。一気に加速し、左手を強く握って前に出す。

敵は苦い表情をした。

「ここからはもう何も考えていない。当たってくれ、と祈る他ない。

だがさううまくはいかなかった。俺の手が届く寸前、敵の右手にあった剣が消えた。同時に左手に剣が現れ、それは俺のほうへ向いていた。

敵の剣は俺の脇腹に突き刺さり、俺の左手の拳は敵のみぞおちにクリーンヒットした。そのまま二人で壁に叩きつけられる。

「ぐっ……」

敵は低い唸り声を出していた。俺はもう泣きたいくらい痛い。壁にぶつかった衝撃でさらに深く刺さったんじゃないか。もう痛みで刺された近くは

感覚が麻痺していてよくわからないけど。

壁をずるずると落下していく。その途中で確かに俺の腹から剣が抜かれたが、もう動ける気がしなかった。上を向いて落ちていく。ただ床か水路に叩きつけられることが怖い。

だが俺が感じたのは柔らかいクッションのような感覚だった。そのあと、俺の背の水が弾けた。かろうじて頭を動かし、扉のほうをみると倒れていた姫様が顔をこちらに向けていた、苦しそうな表情をしていたが、何とか笑って見せてくれた。

そのすぐ横に、敵が降り立った。剣を振り下ろそうとしている。俺を助けたからまだ余力を残していたことがバレたんだ。

立たないと。立ち上がらなくちゃならない。けれど腕に力が入らない。痛い。血が流れていく。

刹那、敵の右腕が落ちた。ニルナさんが背後から斬り落としたのだ。

これで勝負あっただろう。敵も疲弊しているようだし、何を代償にしているかはまだわからないが姫様の自由が殆ど無いことを見ると敵にはもうロアを使う余裕はないだろう。

朦朧とする意識を手放そうとした、その時だった。

「ニルナさん！」

叫んだが、遅かった。斬り落とされた右手がニルナさんの足を掴み、敵の左手には右腕と一緒に床に落ちたはずの剣が握られていた。ニルナさんはバランスを崩して倒れていく。

俺は本のページをめくった。敵は剣を振り下ろそうとしている俺に気づいていない。

結局俺は何を代償にしているんだろうか。俺は何を犠牲にして戦う力を手にしているんだろうか。まだわからない。ただ、今は、ニルナさんとノーリスを守りたい。

目を閉じた。

そつと目を開けると、目の前に敵の左手があった。俺はそれを掴んだ。

「!？」

敵は心底驚いた顔をしていた。その顔を思いつき殴ってやる。

敵は吹っ飛び、突っ伏した。剣はカラン、と床に落ち、そしてもう彼は動かなかった。

視界が揺らぐ。脇腹が痛み、血が足を伝っているのがわかる。

膝から崩れるように倒れた。

「う……」

目を開けると、なんだか装飾が施された天井が見えた。部屋の中には薄つすらと陽の光が差し込んでいる。朝なのだろうか。

重たい身体を起こす。恐る恐る脇腹を触ってみたが、特に痛みはない。治療してくれたようだ。

部屋の中を見渡してみると、ベッドのすぐ脇に立っている人がいた。

「おはようございます、行次さん^{ゆきじ}」

「ああ、おはよう、ノーリス」

俺は寝ぼけ眼をこすりながら返事をした。

「……あ」

気が抜けていてつい名前ですんでしまったが一国の姫しかも美少女！ これ

はげばい……か？

「わごわと姫様の顔を見ると、俯いていた。

「いやあのすみません寝起きで頭回ってなくて」

「……ごう」

「はい……」

「それ、いいですー」

顔を上げると目を輝かせていた。なぜだか頬も紅潮してるような気がする。

「私のことを名前で呼んでくださる方はいませんでしたので、是非そのままでお願ひします！ あと敬語もなしでー」

「姫様も敬語使ってるんですけど……」

「その、私は敬語ではないのがすごく苦手なので……すごく自分勝手なのはわかっているのですが、だめ、ですか……？」

頬を染めた超絶美少女に朝イチでおねだりされるなんて失神しそつだ。

「わかりました……えつと、ノーリス、よろしくな」

「はいー 行次ー」

もう死んでもいい。

「行次様、姫様に手を出されましたら私が直々に葬りますので」

お盆に飲み物を乗せてやってきたニルナさんが、言った。

「あ、おはようございませぬニルナさん……聞き間違いですか、今の『様』って」

「いえ、聞き間違いはありません。行次様は国を上げてお客様としてお迎えすることに決まりましたので」

ハーレムだ。俺のハーレムが今始まる。

……なんだか眩しいな。部屋に差し込む陽の光がより強くなったような気がする。

する。

「あ。……あああああああー」

「ど、どうしたんですか」

「学校行かないと……」

姫様あらためノーリスは吹き出した。つられてニルナさんもくすぐすと笑う。

「戦ったあとでやっと目覚めたところなのに学校なんて……」

「全くです」

暖かい部屋に笑い声が響いていた。

彼女たちの笑っている顔を見ると、命をかける意味はあつたのだと思えてくる。

避難所で「戦う」と言った俺はきつと、こんな日常を守りたかつたのだ。

……でも腹をぶつ刺されるのはもう勘弁して欲しいかな。

第三話「アイツ強かつたな」 完

○あとがき

どうも。はじめてガチガチの戦闘描写をして死にかけました。日常パートはこんなにも楽なのにバトルを書くのはどうしてこんなに辛いんだ。

実は戦いの結末も書いてる途中でやたら変わりました。第一話を書く前から考えてたのだと、主人公が敵を剣でぶつ刺してそのまま自爆し、「ヤムチャしやがって……」をするつもりだったんですけどなんか書いてたら逸れました。

あとニルナさんは姫様を庇ってぶつ斬られるはずだったんですけどたぶん

この主人公はそうなる前に敵を止めるだろうということ、実際に止めました。あと主人公は覚醒して敵をばっこばっこにするはずだったんですけど、この敵はそんなに強くないんで姫様&ニルナさんと戦ったあとにそこまで力を残されてると「仲間になった途端クソザコなメクジになる現象」や「二回目の戦いは隣殺される大賞受賞」だったりするんでやめときました。

はい。なんか軽くネタバレっぽいことしたところであとがきは「こまでです。とても言うと思っていただけの？」

なんか専門用語いっぱいできてきたんでおそろい。「こテストに出ますよ。」

・ロア

物語の舞台となるファンタジー世界での「魔法」みたいなやつ。自分が最も失いたくないと思うものや、他の人間より優れた何かが使用者本人からのみ失われる。逆に言えば、ロアを使わずに死めぬのは最悪本人だけ。

ゼロアス(後述)と契約した人と契約すれば失う代償はその人と同じになる。ちなみに、ゼロアスと直接契約した人は、年月が経ったり価値観を揺るがす出来事があったりしたあとで契約を更新すると失う代償が変わったりする。

基本的にそれ相応の対価を支払えば何でもできる。もちろん何の変化も感じない主人公も何かを失っている。いつ判明するかはまだ未定。

ゼロアスにあるリアルから呼び出して使用するけど、慣れると別にページめくらなくてもいい。それどころか主人公がやってるまばたきも必要ない。でも慣れないやつとか適正がないやつはページめくる作業しないといけない。ちなみに姫様がロアを発動するトリガーは一瞬「息を止める」。

ロアの適性の話はいつか出てくるけど、今判明しているところを言うなら、

姫様は水の適正、敵くんは氷の適正がある。正直相性が悪すぎたので姫様は苦戦した。本当は強いんですよ。

・ゼロアス

国の象徴。王以外何人たりとも触れてはならない神聖なもの。その正体は強力な武器であり、ロアを記録しているリアルを内包している。リアルはロアの図書館みたいなもので、先人たちが開発してきたロアが最短手順で呼び出せるようになってる。

花かと思つたら剣になったり、リリース様なる蝶々が出てきたり、まだまだ謎の多いもの。

・フロレリヤド・レクエンシア

主人公が降り立つた国の名。花と水と乙女の国。女性しかない。これには深いわけがある。まあそのうち。

言語はフロレリア語で、通貨はレクス。国民はみんな姫様と契約しているの。「自由」の代償。死因はほとんど老衰の平和な国。だいたい姫様のおかげ。姫様天使。ちなみに人口が千五百人くらいしかない小さな国。

国の面積は三万平方キロメートルだったり、出張集落という資源を集める遠征部隊の村みたいなものがあるという設定もあるが、本編に出てくる可能性はなしにそのうち変更されそう。

お城の西の方にある森にはドラゴンが住み着いているらしい。

本当はもつと大量に設定があるんですけどこのへんで。

こんなところまで読んでくださった方は本当に有難うございます。

ではまた次回。

あなたの見ている世界は何色ですか？

天球少女と生命の樹

シナリオ：矢野ヒカル

まったくどうして奇妙な世界に生きている。

ちよいと世界がおかしく見える。

眼鏡を掛けていないのではないか？

いや、違う。

そう、違う。

ちょっと色が違うだけだ。

一人の少女の話をしよう。

最初から。

彼女は二つくりの髪を揺らし、世界に触れる。

そう、触れる。

世界と戦うのか、はたまた、世界を愛すのか。

それは君が決めてくれ。読んだ後にでも、ゆっくり話をしようじゃないか。

ともあれ、彼女は最初の人間。

そう、世界ではじめての人間さ。

だから、君が決めて欲しい。

彼女の意味を。

そう。

同じく、世界で最初の人間である君が、ね。

「さあ廻子、学校に行こう」

「もう十時じゃないですか。学校始まっているので行かないです」

「遅刻でも行かないよりはまだ。ほら、着替えて」

家に帰ってきたらすぐコシだ。

もうずっと木の上で暮らしたい。

「早く着替えないとお兄ちゃんが着せ替え人形プレイしちゃうぞ」

なんだよこのテンション。

家の中だと性格変わっちゃう系男子め。

「はいはい。分かりました分かりました。着替えますよ」

「OKOK。ではでは……」

何座っているんだコイツは。

「出てって」

顔面パンチ。

「ぐへっ」

「嫌だー。異教の教えなど聞きとうないー」

「お前は宗教者か、中世の科学者か」

「現代の妹ですよ」

学校は嫌いだ。

あんなことを学んで一体どうなるというんだ。

特に理系科目。

あんなの科学じゃない。

科学ってのは普遍不変してるものじゃなくて、もっと別のものだと思うんだよ。

「そんなことを言っても、勉強するに越したことはない。就職とか、色々あるだろ？」

「お兄ちゃんのヒモになるので大丈夫です。ひもひも」

「おいおい、本気にしちゃうぜ」

「いいよ。私お兄ちゃんのこと世界で一番好きだから」

「……！」

引きこもりがちなので男子の友達はいない(もちろん女友達も同様。HAHAHA)

選択肢が一つなので、選択の余地はない。

この選択肢をたたっ斬って二つにすれば話は別だけど、私にそんな力はない。

そもそも私はお兄ちゃん以外の人間とほとんど会話をしない。

学校はもちろん。親も……。

昔の話だが、親は海の藻屑となった。

……。

嘘だ。

どっかにいるらしい。

定期的に送られてくる生活費で私達の生活は成り立っている。

仕事場が遠くなる際に両親だけ引っ越した。

私達をくっつけたい両親。

大好きな美少女妹と一緒にいたい兄。

親から学校に行けと言われたくない私。

四人の想いが一体化した結果そうなった。

両親はなぜ私達をくっつけたがるのか。

お兄ちゃんがお父さんの事をお義父さんと呼んでいるのに関係があるのだろうか。

メグリコ、バカダカラ、ワカラナイ。

「それにしても久しぶりだな～廻子と登校」

「そうだね」

一ヶ月ぶりかな。

元気してるかな……と言いたいけど、そんなことを言う相手はいない。

強いて言うなら、う～ん。机と椅子？

友達、机と椅子は消えていた。

初めての友達が奪われた。

その事実には半ば絶望しながらトイレに向かった。

個室に入り息を吐く。

落ち着こう。

落ち着いた。

さて帰るか。

机と椅子が無いという大義名分を得た今、私を縛り付けるものはない。

トイレのドアを開けた。

羽ばたけ私の翼。飛ぶんだ。ヤー。

「佐藤さん？ 久しぶり～」

翼は消えた。

大義名分は糞理論だった。そもそも机も椅子も消えてなかった。

「いや～心配してたんだよ～」

一体誰なんだコイツは。

妙に親しくしてきやがる。

「一週間ぶりかな？」

一ヶ月ぶりだ。

「でも元気で一安心！」

何故私が登校すると安心するんだ……。

私はコイツに安心を与えるために生まれてきたというのか？

安心製造機であると気づいた私はそれから毎日学校に通った。

私が登校すると彼女は安心する。

だから行く。

私は安心を与える。

私の中の安心から。

私の安心を受け取った彼女は安心する。

それはもう私のではない。

彼女の安心となる。

安心を製造し、彼女に投げつける日々。

私は安心することがない。

安心が無い。

無安心。

安心がないだけで私の心は安心の対極に近づく。

作れども作れども私が安心で満たされない。

安心の総和は零であったのか？

であるならば……

「その安心は返してもらおう」

「君の安心が無くなるのは悲しいが、だからと言って私の安心をあげる理由はない」

「この安心は私のものだ」

「ではさらば。もう会うことはないだろう」

教室を出た。

私の心は安心で満たされた。

「あっはい」

「その『あ』んしんは返してもらおう」

「君の安心が無くなるのは悲しいが、だからと言『っ』て私の安心をあげる理由はない」

「この安心『は』私のものだ」

「ではさらば。もう会うことはな『い』だろう」

言語を限りなく短縮する。

ギャル語というヤツだ。

「じゃあ、これ、来なかった時のプリントとかノートだよ」

どうやら私の言葉は彼女には届かなかったようだ。

目の前に置かれたのは大量のプリント。

帰りたくなってきたな。

しかし容赦なく授業開始のベルが鳴る。

遅刻してきたので二限目から。

科目は地学か。

これまた珍妙な学問だな。

一般的独断に満ちている。

特にこのロケットとか言うヤツ。

宇宙に行くのにあまりにも仰々しすぎるのではないか。

しかも大部分は燃料やらなんやらで宇宙空間に捨てられるという。

勿体無い。ひどく勿体無い。

もっと別の方法があるだろ。

例えば同じロケットでも横に移動するとか。

人間はさ、あたりまえだけど上下より左右のほうが移動しやすいよね。

そりゃそうだ。何キロ先へも歩いていけるけど、どんなに頑張っても 10 メートルは飛べない。

ロケットもそれと同じじゃないのかな。

横に移動して行ったらいつか宇宙に着くんじゃないのかな。

横に行く限りどこまでも行けます。

果てまで行ったら、どうなるんでしょうね。

ぶつかっちゃうんですかね。

多分、なるようになるんでしょう。

といっても、私はロケット技師じゃないのでどうしようもないんですよ。

だからこの科目は、そういう考え方もあるよね一程度にしか思うことが出来ない。

音が私の耳を通り抜ける。

教師の声は私以外の学生の耳に吸収されていく。

私はというと……、別に届かないわけじゃない。

届く、が、すり抜ける。

頭では理解している。

でも、そんなことありえないと思うほどの阿呆らしさが私にはある。

科学というヤツは論理的必然性を思い求める学問だと解釈している。

私がそう解釈しているのではなく、一般人がそう解釈しているのだらうと私が思っている。

私の考えは別にある。

一般人とは全く逆。

論理的必然性じゃなくて、そうだね。

感情的運命性かな。

論理の対義語が感情なのではない。

必然の対義語が運命なのではない。

でも、なんとなく。

論理的必然性の対義語は感情的運命性だと思う。

普通とは真っ向から対立する考えだな。コレ。

何を言ってるんだろう、ね。

まあ、一般人と違うことをしたい「ちょっと痛いオンナノコ」なんですよ。廻子は。

廻子の「め」は「めんどくさい」の「め」～。

お昼休み。

一時間(いや 90 分なんだけどね)の授業を受けたから帰ろうかなと思ってたけど、お兄ちゃんがお弁当を作ってくれたのを思い出した。

木の上で食べるのもいいんだけど……。

絶対学校で食べるよ！ 絶対だぞ！！

とか言われちゃったからね。

さすがにここで食べなきゃいけない気がしてくる。

廻子は素直じゃないけど優しいので食べてあげます。

さあ、お弁当箱を机にセット！

いざ、開封……、

「佐藤さーん。一緒に食べよ～」

横に座られた。

前の休み時間に話しかけてきた、あの、えっと……人。

誰なんだコイツは。

「楽しみにしてたんだよ。こうやって二人で一緒に食べるの」

ここで食べるという私の選択はお兄ちゃんの為にしたことだ。

君の為にしたわけじゃないんだよ。

と思っても、結果として彼女の為にもなったことには変わらない。

「もしかして、邪魔だった？」

邪魔なわけではない。

邪魔なわけではないのだが。

私と一緒に食べることにより、君は変な目で見られる……。

違うな。私は他の人を気にかけるような人間じゃないな。

一人にさせて。群れるのは嫌い……。

これも違うな。別に誰かと触れ合うのは嫌じゃない。

•一人のほうが楽。

•君と一緒に嫌。

色々と考えたけど特に断る理由がないことに気がついた。

「あっ、別に……大丈夫です」

「そう？ 良かった〜」

これでよかったんだと思う。

お兄ちゃんもこれを望んでいるし、彼女も望んでいるのだから。

軽い会話が私を苦しめるわけがない。

「さてさて、今日のお昼は何ですかな〜」

洋々と弁当箱を開ける。

「ふむふむ、玉子焼きに一口カツ、お米にはふりかけつき」

野菜の緑少々。

「普通カー」

頭が机にゴツン。

うなだれる少女。

いいじゃないか普通。

君たちにはお似合いだ。

私も開ける。

—アイシテル—

蓋を閉じる。

目を閉じる。

普通、普通、普通。と三回唱える。

目を開ける。

蓋を開ける。

—アイシテル—

普通じゃなかった。

普通は嫌だ。なーんて思ってる痛いオンナノコなんだけど。廻子は。

流石にこの瞬間だけは普通に憧れた。

「おやおや〜相変わらずラブラブですな〜」

なんでコイツは知ってるんだ。

まあいいや。

せっかく作ってくれたから食べなくてはな。

味に変わりはない。

それに、お兄ちゃんに愛されるのは嫌いじゃない。

嘘。

好き。

大好き。

愛は重かった。

意外とボリュームがあって驚いた。

なんですかもう。

もっと食べて大きくなれよ的な意味合いですか。

誰の胸が小さいですか！？

はっ！

そんなこと誰も言ってないじゃないですか。

なんだか気分がいいので次の授業も受けてあげましょう。

その次は、わかりませんが。

さてさて、次の授業は……数学。

食事後に数学とは。

おのれ時間割審議会め。

完全に学生を殺しにきてるじゃないか。

眠っちゃいますよ。

いいんですか。

数字。

数学記号。

それらは組み合わせり新しい言語となる。

異国語を学ぶ教科。それが数学。

わかりにくい概念を数字を通してわかりやすく伝えてくれる、えらく親切な学問。

学ぶのに前提条件が多すぎる他の理系教科と違い、順序を守って覚えていけば確実に理解できる学問。

私はそう考えている。

だからそこら辺の科目よりできるはずなんだけど……

やはりブランクの壁だな。

基本をしっかり学んでいけばいいということは、基本ができないと駄目だということ。

基礎のないところに城は立たない。

至極当然。

だからもういいんじゃないかな。

帰っても。

開始五分でこれだけ。

どうしろというのさ。

苦手なことから逃げてるって言うけどさ。

別にそれいいじゃないか。

愛の逃避行と考えたらろまんちっくでいいじゃない。

出来ないことは出来る人へ。

出来ることは率先して。

そういう相手がいるんですよ、ね。

私に出来ること……。

なんだろうね。

とりあえず、ねる。

おきた。

おこされた。

さっきの少女。

まだ名前聞いてなかったなそういや。

ともあれ、この子が起こしてくれたということは授業が終わったということだな。

意外と早いもんだな。

眠ってるで一瞬だ。

長い時間が一瞬。

つまり眠ってる間は時間旅行が出来るということか。

もっかい行ってきます。

「ちょっと、佐藤さん。寝てばっかじゃ駄目だよ～」

肩を揺らされる。

ぐおおお。

なんか気持ち悪いぞコレ。

「次の時間は体育だよ。佐藤さんはなんだっけ？ 私は……」

そうか。体育か。確かお兄ちゃんと一緒にの……

「サッカー」

持久走だったな。

よりもよってなんで私はこんなめんどくさいヤツを選んだんだ。チクショウ。

まあ、体操服忘れた(そもそも存在を忘れてた)から見学なのは良かったけど。

お兄ちゃん頑張ってるな。

まあ、体育会系じゃないから男子としてはゆっくりなんだけど。

楽しそうに走ってる。

隣にいるのは、誰だあの女？

「お兄さん、実は私、貴方のことが……」
「すまない育子。俺には廻子という心に決めた女が……」
「そんな、兄妹でだなんて。不純ですわ」
「不純でも何でもいい。俺はアイツの事を愛してる」
「うっ。二人は結ばれませんのよ」
「法律なんかで俺を縛れると思うなよ。そんなもん、ぶっ壊してやる」
「ううっ。廻子さんと……お幸せに……」

育子は走り去っていった。

読唇術だ。

完璧だ。

まさかお兄ちゃんがここまで私を愛しているだなんて。

知ってたよ。

でも、言葉で言われるとちょっとグツときちやう。

「ふいー。ちょっとインターバルー」

育子、じゃない。この人はさっきの……

名前は知らんな。

景子かな。

「佐藤さんは見学？ 私もこのままサボっちゃおうかなー」

人をサボりのように言うのはやめてくれないかな。

「そういえばさ。佐藤さんのお兄さんってどんな人？」

「佐藤さんのお兄さんだからカッコイイんだろうな」

なんだなんだ。

育子のみならず景子までお兄ちゃんを狙ってるのか？

この場は危険。

戦略的撤退だ。

「あっ、あの……」

「どうしたの、佐藤さん？」

「あっ、また。今度、ね」

逃げるようにしてその場から立ち去った。

じゃあね。景子。今度は名前、教えてね。

木に向かう途中。

少し、考えた。

はたから見れば私は変なヤツなんだろうな。

特に病弱でもない。

コミュニケーションは苦手だけど、いじめられているわけでもない。

そんな私が学校にも行かずにしてることは、

ここに来ること。

菩提樹。

インド原産の木。まあ、色々種類はあるらしいんだけど。

とにかく葉っぱの形が綺麗。

果実は数珠にされたりする。

仏教と関係しているらしい。

お釈迦様が悟りを開いた？ この樹の下で生まれた？

そんな感じだったような。

宗教は木が大好きなようで、シンボルとなる木が登場するものも多い。

仏教ではこの木、あとは沙羅双樹とかかな。

実際の木じゃなくてセフィロト？ とかいうのもあるらしい。

また調べておこう。

セフィロト、菩提樹、沙羅双樹。

どれも名前がカッコイイからなんとなく気に入ってる。

でも、それだけじゃない。

この木には惹かれる魅力がある。

なんだろうか。どう言ったらいいだろうか

理由なんか説明できないけど、魅力的。凄く。

もしかしたら私はこの木の精霊なのかもしれない。

菩提樹の花から生まれた廻子だったのだ。

可能性としてはゼロじゃない。

でも、そうじゃない。

……たぶん。と付け加えておく。

なんとなく。だけどね。

なんとなく。なんとなく。

でも、確かにあるんだよな。

この気持ちは。

多分、私は私よりもお兄ちゃんよりもこの木が好きだ。

木登りを始め、少しして定位置に着く。

授業中寝てしまったからもう寝る気にはならない。

何をしよう？
何もしない。
何もしない。

取り留めもないものが頭に浮かんでくる。
今日の授業の話。
難しそうな微分。
非合理的なロケットの話。
景子との会話。
お兄ちゃんと謎の女の会話(妄想)。

浮かんでは消え、流れていく。そしてまた生まれてくる。
無理に消し去ろうともせず、私は、ただそれを見ている。

明日どうするかな。明日も学校行こうかな。
お兄ちゃんはどう思うだろう。
やっぱり行って欲しいのかな。
行かなくてはならないのはわかってる。それがわからないほど馬鹿じゃない。
でも、行くべきじゃないと感じてしまうほど私は阿呆だ。
ちょっと明日のことも考えて、木を降り、家に帰った。

「途中で帰ったのはアレだが、半分以上出てたからな。まあ合格だな」
「不合格ならどうなるの」
「俺と一緒に風呂に入ってもらおうが」
「うわぁ」
うわぁ。
「そんな露骨に引くな。悲しくなる」
「変態お兄ちゃんは置いておくとして、明日はどうするの？」
「当たり前だ。学校に行く。もちろん廻子も一緒に」
「ええ～」
「当然」
「ご褒美はないの？」
「ないよ！ 義務で権利だよ！」
「そんなものは放棄してやります」
「はぁ。で、どうするの？ 来るの？」
「私は行く気がないけど、お兄ちゃんがどうしてもというのなら、考えてあげても」

「何故俺がお前に乞わんといかんのだ」
「交渉決裂。じゃあ夜ご飯にしましょう」
「……」

ご飯を食べて、お風呂に入って、ベッドにぱたん。
どうしようかな。
木に行くか、今日はここで寝るか。
行ったらまた寝過ごしてしまいそうだな。
学校に行かないから別にいつまで寝ててもいいんだけど。
まあいいや。今日はここで寝よう。
今日は疲れたから早めに眠れると思う。
おやすみなさい。

夢。
下。
どうやらありふれた場所。
流れていく風景。
そして黒。
お兄ちゃんと私。
手をつないでいる。
私は、震える。
無関心。
轟音。
胸が締め付けられる。
握る手の力が強くなる。
安心したい私。
安心できない私。
二つが一つ。
だから。
私は。
耐え切れなくなって……。

たぶん。この先は見てはいけない。
見るべきではない。

目を無理矢理開けた。

時計を見る。
四時。
早過ぎるな。
目を閉じる。
さっきの光景が浮かび、すぐ目を開ける。
気がついた。
手、すごい汗。
というより体中？
下着から何まで全部変えよう。
落ち着かないから、木に行こう。

家から少しの距離にある。
いつも通りすいすいと登って定位置へ。
祈るわけでもなく、
願うわけでもなく、
乞うわけでもなく、
信じるわけでもなく、
想うわけでもなく、
拜むわけでもなく、
歌うわけでもなく、
ただ、見てる。
そして見ることも止め、あるがままの心へ。
一つ、呼吸。
吐いて、吸う。
坐禅をイメージした所作。
しかし、坐禅のようなきっちりしたやつじゃなくて、だらんと、背筋曲がっている。
坐禅だったらアレで叩かれると思う。
目を閉じるわけでもなく、
目を開けるわけでもなく、
眠るわけでもなく、
眠らないわけでもない。
意識が沈んでいく。
深く、深く。
深く。
深く。
.....

.....

.....

音がした。

足を動かし歩き出す。

駄目だった。

歩こうとしたがここは木の上だった。

しかも寝転んでるから、足は空を切るばかり。

失敗失敗。

何が失敗なのかはよくわからないけど。

とりあえず失敗ということにしておこう。

腕時計をちらり。

九時。

寝てしまったのか。

寝てしまったのだ。

これも失敗。

この失敗は明らか。

坐禅だったらアレで叩かれてる。

アレってなんて言うんだろう。

まあ、アレか。

やっていてアレだが、時間が悪かったな。

本当の私はこんなもんじゃない。

もっと凄いんだぜ。

また見せてあげましょう。

誰に？

私に。

体を反転させる。

仰向けからうつ伏せへ。

両腕で枝に抱きつき、さらに体を移動させる。

重力に従い、落下。

腕で支える。

脚をぶらぶら。

スカートじゃないから中身は見えないんだぜ。

ぼうぎよ、ぼうぎよ。

かんぺきぼうぎよ。

今日はお兄ちゃん来ないからどっちでもいいんだけど。

ぼうぎよ、ぼうぎよ。

ぶらぶら、ぶらぶら。

ぼうぎよ、ぼうぎよ。

ぶらぶら、ぶらぶら。

疲れた。

肉体派じゃないんですよ、廻子は。

ほっ。

なんとか定位置に戻る。

ふう。一安心。

遊んでいて落っこちるなんて洒落にならないですよ。

危機回避。危機回避。

腕の疲れを完全に癒し、さあ行こう。

一番上へ。

高いところへ登るに連れて、幹が細くなっていく。

掴みやすいんだけど、少し心配。

廻子は軽いから大丈夫。

大丈夫。

大丈夫、なはず。

太ってない。

私は太ると胸から太っていくタイプだから。

胸が無いということは太ってない。

誰の胸が無いですか！？

どンドン、するする、がりがり？ 登ってついに到達。

てっぺん。到達。

「綺麗」

「美しい……」

「何気ない風景、いつもの街」

「特に感想なんて抱かない世界」

「けれど、ここから見える世界は」

「いつもと違って、美しい」

「今は午前」

「太陽が昇っている最中」

「夜空は少しだけさようなら」

「今は太陽の時間」
「太陽の手前に見えるは雲」
「時には太陽を隠してしまう」
「けれど、今は快晴」
「今日の雲は控えめ」
「粋な計らいをしてくれる」
「ああ、この世界は美しい！」
「この世でこの世界を見ているのは私だけ」
「私だけが知っているこの景色」
「なんと美しいことか」
「美しき世界よ！」

「世界最初の人間は言った」

「なんと未開の荒野か！」
「木々は自由に生え、しかし、秩序じみている」
「獣は緑の世界に色を添える」
「水は澄んで美しく」
「魚は現を見せて舞い」
「鳥の声は大地を揺らす」
「ああ、美しきかなこの世界」
「しかし、なんてことだ！」
「私が一歩、歩むとすれば、この景色は終わってしまう」
「美しき世界が終わってしまう」
「そんな予感が私にはある」
「だが、歩まずにはいられない」
「衝動、欲望、本能、感情」
「すべてが私を歩ませようとする」
「そうか！」
「私は人間だったのか」
「そうか。そうだったのか。それならば」
「歩まずにはいられない」
「足を進めずにはいられない」
「美しきものには、手を伸ばさずにはいられない」
「さらば美しき世界よ」
「私は人間だ」

「故に進む」

「いざ参らん」

「美しき世界に祝福あれ」

「人類の未来に祝福あれ！！」

彼は歩き始めた。

今もなお、歩き続けている。

歩き疲れた私、そしてあなたは美しき世界を忘れた。

そして再び私はここで美しき世界を見ている。

しかし彼と違って私は、まだ歩めないでいる。

歩むことは出来ないが、降りることは出来る。

木から降りる。

するするの反対だから、るするす？

そして再び定位置へ。

さて、文学少女廻子はポケットから文庫本を取り出した。

タイトル「廻子ノート(仮)」

著者は佐藤廻子。

白紙の文庫本に私の言葉で記していく。

今日は 68 ページから。

書く。

私のこと。

お兄ちゃんのこと。

この木のこと。

思ったことをそのままに。

ボールペンで、消えない字で。

私の想いはいつか消えてしまう。

だからせめて、この本には今の私を写したい。

かきかき。

かきかき。

消せない分、文字選びは慎重に行わなくてはならない。

書いた瞬間に後悔するなど言語道断。

今の私の最高の言葉を残していく。

かきかき。

かきかき。

かきかきと言いつつもまだちょっとしか書いてない。

進まないものは仕方ない。

仕方ないからご飯にしよう。

とりあえず食べないことには始まらない。

今日はおにぎり。

おかずをお弁当箱に詰めるのが面倒だったのでおにぎりにしてみました。

まずは一つ目。

海老天むすびー

お味は塩です。

もぐもぐ。

うまい。

二つ目。

海老天むすびー

お味は出汁です。

もぐもぐ。

うまい。

最後。

海老天むすびー

お味はわさび醤油です。

もぐもぐ。

うまい。

お茶を飲み一息。

さて、作業再か……い……。

ねむい。

寝ましょう。

欲望には素直になったほうがいいんですよ。

書きたいのはやまやまなんですけどね。

どうにも私の眠気がそれをゆるしてくれないんですよ。

書きたいんですよ。

本当……に。

食べてすぐ寝たら太る？

だから大丈夫ですってば。

胸から太っていくから……。

目を開けた。

今日何回目だろう。

寝る子は育つと言いますし、むしろ推奨さえされるはずです。

……です！

降りましょう。寝てばかりでは身体が固まってしまう。

……………

……

地上に降り立ち、伸び。

体を揺らす。

捻る。

ぱきっという音がして少し焦る。

痛いぐらいに鳴った。

気にしてもしょうがない。

肩を回す。

鳴らない。

ちょっと残念とってしまった。

体操終了。

時間はお昼ちょっと過ぎ。

お腹は、空いてない。

家に帰って昼ご飯。という訳にはいかないな。

どうしましょう。

登りましょう。

登って、定位置に行って、呼吸をして。

また登って、更に登って、てっぺんに立って。

美しい世界を見て、何も出来なくて……

一連の所作。

何かを目的としているわけではない。

理由があるのではない。

そこにあるのは、私がしているという事実。

祈りじゃない。

感謝でもない。

ただ、そうしたいと思ってそうしてる。

得るものはない……

いや、違う。

一つあった。

「可能性」

何かが出来るようになる。

そんな気がする。
新しい私になる。
そんな気がする。
実はそんなものないのかもしれない。
けれど、ある。
そんな気がする。
だから「可能性」
これは「可能性」
ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ、幸せになった気がする。
そんな「可能性」

所作を終える。
もう何回も繰り返したので慣れた。
スムーズに済ます事ができる。
時計を見る。
十六時。
長い時間がまるで一瞬のよう。
帰ろう。
ちょうど下校時間だ。
もしかしたら、帰りにお兄ちゃんと会うかも。

会わなかった。
その代わりに私の前にいるのは景子。
景子よ、君じゃお兄ちゃんの代わりにはなれないんだよ。
悲しい目をした。
でも、景子は昨日と同じ明るい声で、
「あれ？ どうしたの～」
サボってました。
すいません。
行く約束などしてなかったから謝る必要などないんだけど、一応。
心のなかでは、ね。
「まあいいや。廻子ちゃん！」
はい？
「楽しみにしてるよ」
「またあしたね」
明日って学校休みじゃなかったっけ。

不登校の私は知らない何かがあるんだろう。
行かないよ。
せっかくの休みじゃないか。
休まないともったいないよ。
休日もまた学生の義務だよ。

帰宅。

夕飯。

「お兄ちゃん、明日、学校で何かあるの？」

「明日、休みだよ」

「そっか」

「？」

景子は天然かな。

「学校行く気になったのか」

「全く」

「はぁ」

「なんで、私を学校に行かせようとするの」

「それがあたりまえだから」

「いや～廻子は普通じゃないので一般の方々と一緒になれないんですよね」

「はぁ」

「そんな溜息ばっかついちゃ駄目だよ」

「廻子はなんで行きたくないの？」

「単順に面白く無いから。木にいるほうが楽しい」

「お兄ちゃんがいてくれたらもっと楽しいのにな～ちらちら」

「俺を落とそうとするな」

「俺は学校に行く」

「私と一緒に居たくないの？」

「学校で一緒に居たい」

「学校だといつも一緒というわけじゃない……」

「メリハリは大事」

「むう」

「はぁ」

「折れないね」

「そっちこそ」

学校の話はここで終わり。

その後は他愛もない話が続いた。
お風呂に入って、ベッドにはたん。
昨日は変な夢を見た。
多分悪夢。
今日は、どうしよう。
また、見ちゃうかな。
木に行くというのも手。
でも、今日行っちゃったらずっと行き続けなきゃいけないよね。
ここで寝るのが怖くなっちゃって、ね。
だから今日はここで寝よう。
悪夢を見たら、その時はその時だ。
おやすみなさい。

暗闇。
上を向いている。
暗闇。
横にお兄ちゃんが、
いない。
それは当たり前。
眠れない。
何時間か過ぎた。
目は覚めていく一方。
どうしよう。
やっぱり木に行こう。
眠れないなら仕方ない。

木に到着。
ちょうど日付が変わる。
上を見る。
星が綺麗。
ここ周辺には街灯はないけど、市街地ということに変わりはないから満天の星空という訳にはいかない。
停電しないかな。
街一体。
無理か。
無理だな。

木に登り、星を見る専用の場所に行く。
今日もスカートじゃないから無敵です。
到着、廻り展望台。
星。

星。

星。

キラキラと光る星。

ちいさな光。

電球やLEDと同じ光。

でも違う光。

星の光は天使的で悪魔的。

得も言われぬ光。

見ていたら吸い込まれそう。

魅力的で、少し怖い。

ずっと見ていたい。

ずっと見る事が出来ない。

この星の光。

どれも同じように見える。

でも、違う。

違うようで、実は同じ。

規則正しく、星々は同じ位置で。

夜になったらこんにちは。

朝になったらさようなら。

毎日少しだけ動かして。

同じように、違うように。

今日と明日は同じ位置で。

半年後には全く違った位置で。

でもそれすらも規則正しく。

面倒くさがり屋の私には出来ない芸当。

恐れ入る。

恐れ入りすぎて、ふと漏らす。

「美しいな」

美しいという言葉で思いつく。

てっぺんに行こう。

あそこからだと更に美しく見えるだろう。

さあ。

.....

.....

.....

携帯食でなんとか飢えを凌いだ。
無茶なんてするものではないな。
気がつけばもう夕方。
私は一体何をしていたんだろう。
無論、天体観測。
太陽も天体。
真昼の月もまた天体。
美しいからね。
ついつい見入っちゃう。
でもそろそろ限界。
お腹すいた。
帰りましょう。

「あっ廻子ちゃん！ また会ったね」
景子だ。
そういや昨日も会ったな。
「今日は楽しかったね」
？
今日？
また天然を発揮してるのか？
「体調、大丈夫？」
「また一緒に行こうね」
「バイバイ」
去っていった。
？
どういうことだ？
脳のお花畑が腐ったのか？
一体何なんだ。
まあいいか。
お腹すいた。

「おかえりめぐりこおおおおおおおおおおお」

「うわあああああああああああああ」

お兄ちゃんが抱きついてきた。

やめろ肩を揺らすな。

目が回るうううううううううう。

「どうだった？ どうだった？」

「何がががああ」

とりあえず手を止めろ。

止まった。

「で、どうしたの。お兄ちゃん」

「とぼけちゃってえ？」

キモい。

死ね。

「キモい、死ね」

「酷いっ」

抱きついてくるキモイヤツを押しつけながらリビングに向かう。

椅子に座りお茶を飲んで一息。

「で！ 何があったの！？」

キレ気味に言う。

「ふいっ」

「あ！？」

キした。

「ごめんごめん。今日廻子がお友達と遊んでくるって言ってたから」

お友達？

木のことかな。

「どこに行くかは恥ずかしがって教えてくれなかったけど」

そんなこと言った覚えがないんだけどなあ。

「それ、いつの話？」

「何が？」

「私が友達と遊んでくるって言ったのは」

「今朝だけど」

今朝？

今日一日中木にいたんだよな。

ということは、

「ドッキリ？」

そう考えるしかない。

私を騙して一体何になるというのだ。

「どういうことだ？ 廻子」

往生際が悪いな。

「私は今日一日ずっと木にいた」

「昨日寝る前から今帰ってくるまでずっと」

「だから、友達と遊んできてなんかいない」

「そもそも友達なんていない」

何言ってるの？ みたいな顔。

私が聞きたいよ。

「でも、廻子、今朝家にいたよね」

「はいはい。夜ご飯にしましょうね」

無理矢理会話を切った。

こういうのには構わないに限る。

ちょっとひどいかもだけど、ね。

夕飯を済まし、お風呂。

服を脱いで脱衣カゴに入れる。

コロッ。

なにか落ちた？

ポケットには何も入れてないと思うけど……。

なにこれ？

ストラップ？

こんなもの持ってた覚えがないんだけどな。

お兄ちゃんのかな？

あとで聞いておこう。

はっ、コレに監視カメラがついていて廻子の着替えが覗かれている可能性が……

ないな。

下着を脱いで脱衣カゴに放り投げる。

さすがに一番上はまずいな。

スカートの下に入れておこう。

お風呂から出て、ストラップのことを聞いた。

心当たり無しだという。

よくわからんな。

もしかして本当に景子と遊びに行ってたのかも。

ないな。ないない。絶対ない。

ベッドにぱたん。
今日は家で寝よう。
そういえば明日は学校か。
行かないけど。
おやすみ。

起きた。
朝ごはんを作った。
お兄ちゃんの登校を見送った。
私は私で木に向かった。

定位置で考える。
ここ最近のこと。
お兄ちゃんが言ってたこと。
私が友達と遊びに行ってたとかいうの。
ただのドッキリにしては妙に気になる。
景子の発言もそう。

「今日は楽しかったね」

まるで本当に遊んでみたい言い方。
その前日にも、

「楽しみにしてるよ」
「またあしたね」

これらから導き出されるのは……、
二人はグルか。
ドッキリにしては手が込みすぎじゃないのかな。
それにしてもお兄ちゃんと景子が実は知り合いだったとは……。
しかも、一緒に仕掛けてくるっていうことは、
もしかして相当仲良し！？
ピンチ。
これはピンチだ。

何が原因だ？

どうみても私が学校に行かないからだよね。

あう。

わかったよ。

私の負けだよ。

仕方ない。

せめて明日は学校に行くか……

これでいいんですよ。

お兄ちゃん。

そこまでして行かせたいのかな。

でも、お兄ちゃんの願いを聞いてあげたんだから私のも聞いてよね。

何にしようかな。

うーん。

そうだ。

これから。

私以外とは喋っちゃ駄目だよ、お兄ちゃん。

「いや～そうかそうか～」

「明日も行ってくれるんだな」

「そう。私の負け」

だからお兄ちゃんは私のものなの。

「ぐへへ」

ちょっと気持ち悪い笑みを浮かべてしまった。

反省反省。

今日の夕食時の会話は盛り上がった。

私も、お兄ちゃんも。

お風呂に入って、ベッドにぱたん。

はぁ。明日は学校か。

まあ起きる時間は変わらないし、それはいいんだけどね。

でも、学校かぁ。

でも、お兄ちゃんのため。

でも、学校かぁ。

でもでも……

いろんなことを考えながら、いつの間にか眠っていた。

登校中。

お兄ちゃんは先に行ってしまった。

私の友達の為って言ってたけど。

そこまでしなくてもいいのに。

友達なんてどうせ出来ないだろう……。

「廻子ちゃん」

「おっはよ～」

景子は、友達なのか？

まあ、ドッキリを仕掛けてきたからね。

「おはよ～」

超笑顔。

こんなに眩しいものを見せられるとさすがの私も反応せざるを得ない。

「あっ、どうも……」

「えへへ～」

近い。

凄く近い。

なんですかこれは。

恋人の距離じゃないですか。

距離を取る。

さっと近づいてくる。

距離を取る。

さらに詰めてくる。

距離を……取れない。

もう道の端っこまで来ちゃった。

どうしよう。

どうすることも出来ない。

学校までこの近すぎる距離だった。

積極的すぎじゃないか景子よ。

「おっ廻子」

「廻子さん！」

「さ、佐藤さん！」

なんだこれは。

なんかいっぱい人。

机の中には、手紙？

いや、ラブレターだコレ。

なんなんだこれは一体。

ドッキリにしてはやり過ぎだろ。

まるでアイドルじゃないか。

「そうそう。これ、出来たよ」

景子。

この異質な環境では景子の声が頼りになる始末。

渡されたのは写真。

「おっ、この前のか」

元気そうな女の人が出た。

この前のって何？

写真。

場所はカラオケボックスかな？

写っているのはクラスメイトと思われる人達。

真ん中にあるのは、

私？

チャイムが鳴った。

徐々に教室が静かになる。

静けさと比例するかのように私の思考は加速されていく。

小さい写真。

写っているのは私。

日付は一昨日。

ずっと木にいた。

でも写っているのはカラオケ。

そして私。

更に考えた。

景子が何故急に仲良く接してきたのか。

景子はいつから私を「佐藤さん」ではなく「廻子ちゃん」と呼ぶようになったのか。

なんでお兄ちゃんは頑なにドッキリと認めなかったのか

それは、そもそもドッキリじゃなかったから？

「私」が友達と遊んだり、学校に行っていたから？

そんな記憶はない。
そんなはずはない。
木に登って、いつもどおりの所作をして。
いつの間にか時間が経って……。

“気がつけばもう夕方。
私は一体何をしていたんだろう。”

いつの間にか？

その間に私が？
いやいや。
そんなことがあるわけがない。
いつの間にかと言うのは表現であって確かに時間は流れていた。
それに、記憶が無いことの証明にはならない。
でも登ってる間の記憶は？

もうひとりの私

ふと、そんな言葉が駆け巡る。
少し、怖くなった。
そんなことはないと振り払った。
明らかな虚勢だった。

休み時間は気持ち悪いぐらい仲の良いクラスメイトが迫ってくる。
何も聞こえない。
何も見えない。
落ち着け。
落ち着くんだ。
目を開け。
目を開け。
目の前にはクラスメイトのスマホ。
ストラップが振り子のように揺れている。
それを私は知っている。
お風呂で見つけたものと同じ。
お兄ちゃんは知らないって言った。

私も知らない。
初めて見た。
私を知るはずない。

でも「私」は知ってる。

60→55

チャイムが鳴った。
チャイムが鳴った。
チャイムが鳴った。
.....
.....
.....

いつの間にか全授業が終わっている。
授業の記憶が、ない。

記憶が、無い？

記憶が無いということは……。
走った。
全力で走った。
息をするのも忘れるかのように。
ただひたすら走った。

55→50

早すぎる鼓動。
早すぎる呼吸。
息を整える。
遅くなっていく呼吸
相も変わらず早すぎる鼓動。
ふらふらと木に抱きつく。
落ち着け。
安心。

安心するんだ。

ここは大丈夫。

大丈夫だから。

私はあんな性格じゃない。

じゃあ何？

私がもう一人いるっていうの？

二重人格？

違うよね。

完全に別人じゃないか。

でも私。

もう一度写真を見た。

「私」

日曜日の私と違うところがある。

服。

この日、私はスカートを履いていなかったはず。

でもこの写真の「私」はスカートを履いている。

だから別人。

二重人格なんかじゃない。

そう「私」はあなたと違う。もう一つの肉体。

二重人格よりもさらに嫌な言葉が舞った。

そんなはずはない。

ないんだよ！

思いだせ。

そんなことは無いはずだ。

私が二人いるなんてそんなことはありえない。

一昨日、私は何をしてた。

木の上での天体観測。

深夜から、朝、昼、夕方まで。

家に帰る。

テンションの高いお兄ちゃん。

お風呂でストラップを発見。

でもそんなことには気も止めず、服を脱いでお風呂に……。

黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。
黙れ。黙れ。
黙れ。
「もちろん学校に行ってる廻子だよ」
黙れ……

目の前が暗くなった。

安心が消えた。
私が消えた。

でも大丈夫。

「私」がいるから、ね。
安心するんだよ、私。

50→0

目を開けた。
太陽は真上を少し過ぎたところに。
私は木の上の定位置に。
気を失う前を思い出そうとする。
首を振ってかき消す。
やっぱり思い出さない。
よろよると木から降りる。
ゆっくりと家に帰る。

夜ご飯も朝ごはんも食べてないから空腹のはず。
食欲は湧かない。
ご飯を無理矢理胃にねじ込む。
気持ち悪くなりながら食器を洗う。
包丁を洗う。
水気を切り、カバンに入れる。
家を出る。
もう一度木に向かう。

もうひとりの「私」。
いつからだろう。
どうしてだろう。
そんなことはもういいや。
大切なのは今。
今。
そう今は授業中。
もう少しで終わる。
学生だから、「私」は。
当然学校にいる。
でも授業が終われば学校から出てくる。
「私」は学生だから、ね。
誰と一緒にいるんだろう。
景子かな。
その他のクラスメイトかな。
それとも、
お兄ちゃんかなあ。

だれでもいいか。
だれでもいいや。

木に抱きつく。
落ちていた葉っぱを拾って握る。

さようなら。
美しい世界。

その先で会いましょう。

美しき世界。
私は誰かを好きになる。
その人は私を好きになる。
私以外を好きになる。
認めてあげましょう。
廻子は大人ですから。
「私」を好きになる。

認めませんよ。

廻子はお子様ですから。

帰宅中の学生の流れを逆行する。

学生の合間を髪が踊る。

一歩二歩。

軽やかなステップで、

重い足を何とか動かす。

目はハッキリと見開いて。

不安が心を支配していく。

不安を押しつけていくのは愛。

心が愛で満たされる。

満たされた愛がさらに体中に広がる。

体の末端まで辿り着いた愛は足の裏から外に流れる。

右手には包丁を。

左手には生命の樹の葉を。

心には無限の愛を。

そして、可能性としての幸福を。

居た。

開かれた目はその姿を捉える。

長い髪。

二つくりの少女。

「私」

横は、景子。

さっと右手を後ろに隠す。

左手を強く握る。

見たことがある。

それは「私」

何回も、何回も見たことがある顔。

マスクで隠してないで、早くお顔を見せてくれよ。

可愛い可愛い、「廻子ちゃん」

「私」はこちらに気づいた。

マスクに手をかけ、取った。
右手を頭上に上げた。
髪が舞った。

空を舞った。

「お兄……ちゃん……？」

マスクを取り、ウィッグを取った「私」はお兄ちゃんだった。
「どういう……こと……」
右手が落ちる。
包丁が落ちる。
目の前にはお兄ちゃん。

私は廻子。

「私」はお兄ちゃん。

「おいおい、包丁持ちだしてどうした？ 危ないじゃないか」
女子制服を着たお兄ちゃんが言う。
「え……えええ！？」
混乱。
混乱。
混乱した頭で考える。

「私」は女装したお兄ちゃんだった！！

そう結論した瞬間。
全力でお兄ちゃんに飛びついた。

「よかった。
良かった、
良かった良かった良かった」
力いっぱい抱きしめる。
もう一人の「私」なんていなかった。
お兄ちゃんは私だけのもの。

力を込めて、抱きしめた。

私を満たした愛はお兄ちゃんに流れこむ。

じっくりと、愛がお兄ちゃんを満たしてく。

二人が愛でいっぱいになったので、私は力をゆるめた。

「どうしたんだ、廻子。そんなに泣いて」

お兄ちゃんのせいだ。

お兄ちゃんのせいなんだよお。

そう思ってゆるめた力を入れなおす。

「えっ、ええええ！ 廻子ちゃんが廻子ちゃんを押し倒して」

「廻子ちゃんの髪が短くて」

「ええええええええええええ！??」

混乱する景子。

いつの間にか人だかりができていた。

そんなことはお構いなしに私はお兄ちゃんを抱きしめた。

「なんで、こんなこと、したの？」

「廻子が学校に馴染めるように、な」

「ばか。そんなことしなくていい」

「私は、お兄ちゃんさえいてくれたらそれでいい」

世界中に私とお兄ちゃんさえいてくれたらそれだけでいい。

「でもな……」

「でもじゃない。絶対！」

「はあ」

いつもどおりの溜息。

「わかった。俺が悪かった。ごめんな」

謝って済むと思うな。

死ぬかと思ったんだぞ。

でも、少しか許してあげる。

この口づけで、ちょっとだけ。

「こんばんは。鵲和です。

段々と表紙に

色が増えてますが、

来月は

減るかなあと

思っています。

続きものではありません。

増やしていつてるわけ

ではないです。

雨と風の季節ですね。

そうだなあ、

今も

雨が降ってるんですよ。

久しぶりに

細くて

透った

冷麦ばい

の

見ましたよ。

From Writers

「こんにちは、マウスです。

一人暮らしの夏、当然のようにエアコンを酷使します。

除湿強の力で今日も快適な生活を享受。

大丈夫、優先度は電気代>食費だから昼飯抜けば余裕余裕。

もうすぐ夏休みですが、変に高い目標を立てると後で残念な

気持ちになるでしょうから、今年によく寝て食べて遊ぶこと

にします。達成間違いなし。」

「全身全霊で書きました。

矢野ヒカル史上最高傑作「天球少女と生命の樹」

まずは第一話です。

なんか全体の七割ぐらいのページ数っすね。

文字数／頁 が「ス」の半分以下しかないのは仕方ないね、

しかめっつら。

ともかく、読んでくれてありがとうございます。

天球少女はしばらく続きますよ〜」

「暑くて溶けそうな「ス」です。

朝もおちおち寝てられないくらいアツウイ！どうなってるんすかね。

かといってクーラーつけっぱにするとすごく体が重くなるんですよ。

難しい季節ですね。

まあ寒いよりは暑いほうがいいんですけど」

早い…止んだわ……」